

洪吟

李洪志

日本語版

苦其心志

圓滿得佛果 吃苦當成樂
勞身不算苦 修心最難過
關關都得闖 處處都是魔
百苦一齊降 看其如何活
吃得世上苦 出世是佛陀

一九七六年十二月十七日



その心志を苦しめる

えんまん ぶっか え
圓滿となつて佛果を得る
く な らく
苦を嘗めるをもつて楽とす
み ろう く さん
身を勞するを苦と算せず
こころ しゅう もつと す がた
心を修するは最も過ぎ難し
かん かん すべ こ
関という関は全て闖えるべし
いたる ところ こ ま
いたる処すべて是れ魔
ひやく く いっせい ふ
百の苦一齊に降る
そ いかん い み
其の如何に活くかを看る
せじょう く た う
世上の苦に堪え得れば
よ い こ ぶつだ
世を出ずれば是れ佛陀

一九七六年十二月十七日

做人

為名者氣恨終生
為利者六親不識
為情者自尋煩惱
苦相鬥造業一生
不求名悠悠自得
不重利仁義之士
不動情清心寡慾
善修身積德一世

一九八六年七月十三日



ひと な 人を做す

めい と もの こころうら しゅうせい
名を為る者は、氣恨むこと終生
り と もの ろくしん し
利を為る者は、六親を識らず
じょう と もの みずか ぼんのう たず
情を為る者は、自ら煩惱を尋ね
くる たたか あ ごう つく いっしょう
苦しく闘い相って、業を造ること一生
めい もと ゆうゆうじとく
名を求めざれば、悠悠自得
り おも じんぎ の し
利を重んぜざるは、仁義之士
じょう うご こころきよ よくすくな
情に動かざれば、心清らかに欲寡し
み よ しゅう とく つ いっせ
身を善く修すれば、徳を積むこと一世

一九八六年七月十三日



覺者

常人不知我
我在玄中坐
利慾中無我
百年後獨我

一九八七年二月二日

註：在我沒有傳法之前自己獨修時所寫。



かくしゃ 覺者

じょうじん われ し
常人、我を知らず
われ げんちゅう あ すわ
我、玄中に在りて坐る
りよく なか われ な
利慾の中に、我無く
ひやくねん のち われひと
百年の後、我独り

一九八七年二月二日

注：私が法を伝え始める前、自ら独修して
いた時に記したもの。

誰敢捨去常人心

常人只想做神仙
玄妙後面有心酸
修心斷慾去執著
迷在難中恨青天

一九八八年八月九日



だれ あ じょうじん こころ す さ
誰が敢えて常人の心を捨て去るか

じょうじん ただ しんせん な おも
常人は只、神仙に做ることを想う
げんみょう こうめん しんさん あ
玄妙の後面に、辛酸有り
こころ おさ よく た しゅうちやく さ
心を修め、欲を断ち、執着を去る
なん なか まよ せいてん うら
難の中に迷って、青天を恨む

一九八八年八月九日

願

茫茫天地我看小
浩瀚蒼穹是誰造
乾坤之外更無垠
為了洪願傳大道

一九九零年一月一日



が 願

ぼうぼう てんち われ しょう み
茫茫たる天地、我、小と見る
こうかん そうきゆう こ だれ な
浩瀚たる蒼穹、是れ誰が造す
けんこんのそと さら はてな
乾坤之外、更に垠無し
こうがん ため だいどう つた
洪願の為に、大道を伝う

一九九〇年一月一日



無存

生無所求
死不惜留
蕩盡妄念
佛不難修

一九九一年十月二十日

無存

生きて求めるもの無く
死しても惜しまず
妄念を蕩尽すれば
佛を修するは、難しからず

一九九一年十月二十日



法輪大法

功修有路心為徑

大法無邊苦作舟

一九九二年七月二十四日

フアールンダーファー 法輪大法

こう おさめ みち あ ところ みち な
功を修るに路有りて、心を徑と為す

ダーファー む へん く ふね な
大法は無辺、苦を舟と做す

一九九二年七月二十四日



容法

佛光普照

禮義圓明

共同精進

前程光明

一九九二年十二月二十七日



ほうとこ 法に溶け込む

ぶつこう あまね て
佛光は普く照らし

れいぎ えんめい
礼儀は圓明となる

とも しょうじん
共に精進し

ぜんてい こうみょう
前程に光明たり

一九九二年十二月二十七日

乗正法船

真乎玄乎修乎

惚兮恍兮悟兮

一九九三年一月十七日

しょうぼう ふね の 正 法の船に乗る

まこと げん しゅう
真か玄か修することや

こうこつ もうろう ざと
恍惚たるか朦朧たるか悟ることや

一九九三年一月十七日



無為

三教修煉講無為
用心不當即有為
專行善事還是為
執著心去真無為

一九九三年一月十七日



無為

さんぎょうしゅうれん むい こう
三教の修煉、無為を講ず
ただ こころ
正しき心であたらざれば、即ち有為
もつぱ ぜんじ おこな これ ため
専ら善事を行うも、やはり是の為にす
しゅうちやくしん さ しん むい
執着心を去れば、真の無為

一九九三年一月十七日

學大法

根基為先天之條件
正悟為上士之慧因
存真善忍心中有道
修法輪大法可圓滿

一九九三年二月十八日

ダーファー amana 大法を学ぶ

こん き せんてん じょうけん な
根基を先天の条件と為し

しょう ご じょう し けい いん な
正 悟を上士の慧因と為す

しんぜん にん そん しんちゅう どう あ
真善忍を存すれば、心中に道有り

ファーレンダーファー しゅう えんまん べ
法 輪大法を修すれば、圓滿す可し

一九九三年一月十七日



圓明

心懷真善忍
修己利與民
大法不離心
它年定超人

一九九四年二月二十八日

えんめい 圓明

こころ しんぜんにん いだ
心に真善忍を懷き
おのれ しゅう たみ り
己を修し、民に利す
ダーファー こころ はな
大法、心を離れざれば
たねん ちょうじん さだ
他年に、超人たるは定まれり

一九九四年二月二十八日



求正法門

功能本小術

大法是根本

一九九四年四月二日

しょうぼう もん もと
正法の門を求む

こうのう もと しょうじゅつ
功能は本より小術

ダーファー こ こんぽん
大法こそ是れ根本

一九九四年四月二日



得法

真修大法
唯此為大
同化大法
它年必成

一九九四年七月七日



ほうえ 法を得る

しん だーふぁー しゅう
真に大法を修し
ただこ だい な
唯此れだけを大と為す
だーふぁー どう か
大法に同化し
た ねんかなら な
他年必ずや成る

一九九四年七月七日

縁

大覺心更明
得法世間行
悠悠數千載
縁到法已成

一九九四年八月二十七日

えん 縁

だいかく ころさら あき
大覺は心更に明らか
ほう え せけん い
法を得て世間を行く
ゆうゆう すうせんねん
悠悠たり数千年
えん いた ほう すで な
縁は到りて法は已に成る

一九九四年八月二十七日



了願

同心來世間
得法已在先
它日飛天去
自在法無邊

一九九四年八月二十七日



了願

りょうがん
おな ころ せ けん く
同じ心にて、世間に来る
ほう え すで さき あ
法を得て、已に先に在り
た じつ てん と さ
他日、天を飛んで去る
じ ざい ほう む へん
自在にして、法は無辺

一九九四年八月二十七日

助法

發心度眾生
助師世間行
協吾轉法輪
法成天地行

一九九四年八月二十八日



じよほう 助法

しゅじょう さいど しんがん ほつ
衆生を濟度せんと心願を發し
し てつだ せけん い
師を手伝って世間を行く
わ ファールン てん きょうりよく
吾れ法輪を轉ずるに協力し
ほう な てんち い
法成って天地を行く

一九九四年八月二十七日

因果

非是修行路上苦
生生世世業力阻
橫心消業修心性
永得人身是佛祖

一九九四年九月十五日



いんが 因果

しゅぎょう みち く あら
修行の路は苦に非ず
しょうじょう せ ぜ ごうりき はば
生々世々の業力が阻む
おも き ごう け しんせい おさ
思い切つて業を消し、心性を修め
えいえん じんしん え こ ぶつ そ
永遠の人身を得て、是れ佛祖

一九九四年八月二十七日

迷中修

常人難知修煉苦
爭爭鬥鬥當作福
修得執著無一漏
苦去甘來是真福

一九九四年九月十五日



迷いの中で修める

じょうじん し がた しゅうれん く
常人は知り難し、修煉の苦
あらず たたか ふく な
争いや闘いを福と做す
しゅうちやく ひと も な おさ
執著を一つも漏らすこと無く、修めれば
くさ かんき こ しん ふく
苦去りて甘來たる、是れ真の福なり

一九九四年九月十五日

實修

學法得法

比學比修

事事對照

做到是修

一九九四年十月七日



着実に修める

ほう まな ほう え
法を学びて、法を得る

ひ まな ひ しゅう
比して学び、比して修す

ことごとたいしょう
事々對照し

な いた こ しゅう
做すところ到的は是れ修なり

一九九四年十月七日

佛法圓容

廣傳大法
度人出五行
恒心修煉
圓滿超三界

一九九四年十月十五日

佛法は圓容

ひろ ダーファー つた
広く大法を伝え
ひと さいど ごぎょう で
人を濟度して五行を出る
こうしん しゅうれん
恒心にして修煉し
えんまん さんがい こ
圓滿し三界を超える

一九九四年十月十五日



再度

法輪常轉度眾生
學法得法修心性
末法之時輪再轉
有緣之士心法明

一九九四年十二月二十七日



再び濟度

フールン つね かにてん しゅじょう さいど
法輪は常に回転し、衆生を濟度す
ほう まな ほう え しんせい おさ
法を学び、法を得、心性を修め
まっぽう とき りん ふたたび かにてん
末法の時、輪は再び回転する
えん あ し しんぽうあき
縁有る士、心法明らか

一九九四年十二月二十七日

真修

心存真善忍
法輪大法成
時時修心性
圓滿妙無窮

一九九四年十二月二十七日



真修^{しんしゅう}

こころ しんぜんにん あ
心に真善忍在れば
フールンダーファー じょうじゆ
法輪大法を成就す
つね しんせい おさ
常に心性を修めれば
えんまん みよう きわ な
圓滿して妙なること窮まり無し

一九九四年十二月二十七日

同化圓滿

乾坤茫茫
一輪金光
覺者下世
天地同向
宇宙朗朗
同化法光
圓滿飛升
同回天堂

一九九四年十二月三十一日



どうか えんまん 同化して圓滿する

けんこん ぼうぼう
乾坤は茫茫とし
いちりん こんこう
一輪の金光あり
かくしゃ よ くだ
覺者世に下り
てんち どうこう
天地は同向す
うちゅう ろうろう
宇宙は朗朗として
ほう ひかり どうか
法の光に同化す
えんまん ひしゅう
圓滿して飛昇し
とも てんどう かえ
共に天堂に回る

一九九四年十二月三十一日



大法破迷

悠悠萬事過眼煙雲

迷住常人心

茫茫天地為何而生

難倒眾生智

一九九五年一月二十七日



ダーファー まよ やぶ
大法は迷いを破る

ゆうゆう ばんじ め す えんうん
悠悠たる万事は眼を過ぐ煙雲

じょうじん こころ まよ
常人の心を迷はせてしまう

ぼうぼう てんち なん ため しょう
茫茫たる天地は何の為に生ず

しゅじょう ち こた がた
衆生の智では答え難し

一九九五年一月二十七日

跳出三界

不記常人苦樂

乃修煉者

不執於世間得失

羅漢也

一九九五年五月



三界を跳び出る

常人の苦樂を気にせざれば

乃ち修煉者

世間の得失に執せざれば

羅漢なり

一九九五年五月

遊懸空寺

百丈山崖寺中懸
洪傳大法難得聞
今生重遊古崖寺
它日法正萬寺傳

一九九五年六月十一日



懸空寺に訪れる

ひやくじょう やまがけ てら なか かか
百丈の山崖、寺の中に懸る
ダーファー くでん ひま え がた
大法を洪伝して、間を得ること難し
こんじょうふたた こがけ てら おとず
今生再び、古崖の寺に訪れ
たじつほうただ よるず てら つた
他日法正されて、萬の寺に傳わる

一九九五年六月十一日

遊恒山

山恒雲嶺道何在
古觀悠悠遊客來
常人不知玄中妙
利用古廟發黑財

一九九五年六月十一日

恒山に訪れる

やまつね くも みね みち いづこ あ
山恒にして雲の嶺、道は何処に在る
こ かんゆうゆう ゆうかくく
古觀悠々として、遊客来る
じょうじん げんちゆう みよう し
常人は、玄中の妙を知らず
こびよう りよう くろ ざい な
古廟を利用して、黒き財を發す

一九九五年六月十一日



分明

佛來世中行
常人迷不醒
毒者甚害佛
善惡已分明

一九九五年七月二十六日



わ 分わかたれて明あきらか

ほとけ き せ ちゆう い
佛 来たりて、世中を行き

じょうじん まよ さ
常 人は迷いて醒めず

どくしゃ はなはだ ほとけ がい
毒者は甚しく佛を害す

ぜんあく すで わ あき
善惡は已に分かたれて明らか

一九九五年七月二十六日

遊南華寺

佛門淨地難清靜
魔道邪心亂世行
越是名勝魔越多
人雜叫賣鞭炮鳴

一九九五年八月十五日



南華寺に訪れる

ぶつもん じょうち せいせい がた
佛門の淨地、清靜たり難し
まどう じゃしん らんせい い
魔道、邪心は乱世を行く
めいしょう
名勝であればあるほど魔多し
ひとこんざつ さけ う ぼくちく な
人混雑して叫び売り、鞭炮が鳴る

一九九五年八月十五日

自修

大法洪揚

幾人能得

世間繁事重重

百忙之間可自修

它日煙雲一過

方知真道已得

一九九五年十月六日



みづか おさ 自ら修める

ダーファー こうよう
大法、弘揚して

いくにん え
幾人が得られるか

せ けんしげ こと じゅうじゅう
世間繁き事、重々

ひやくぼう ひま みづか しゅう べ
百忙の間、自ら修す可し

た じつ えんうん す ざ
他日、煙雲が過ぎ去れば

しん どう すで え はじ し
真の道を己に得たことを、初めて知る

一九九五年十月六日

靜觀

靜修閒來看神仙
各顯神通千百年
人心魔變世不同
眾神不度待劫完

一九九五年十月十六日



靜觀

靜修の間に、神仙を見る
各れ神通を顯すこと、千百年
人心が魔と変わり、世は同じからず
眾神は濟度しようとせず、
劫の終わるを待つ

一九九五年十月十六日

洪

蒼穹無限遠

移念到眼前

乾坤無限大

法輪天地旋

一九九五年十一月九日



こう
洪

そうきゆう むげん とお
蒼窮は無限に遠く

ねん うつ がんぜん いた
念を移せば眼前に到る

けんこん むげん おお
乾坤は無限に大きく

フアールン てん ち まわ
法輪は天地に旋る

一九九五年十一月九日

主掌天地

天之大天上有天
同有日月層層滿蒼宇
地之廣有天有地
共生萬物芸芸遍乾坤

一九九五年十一月十日



天地を主宰す

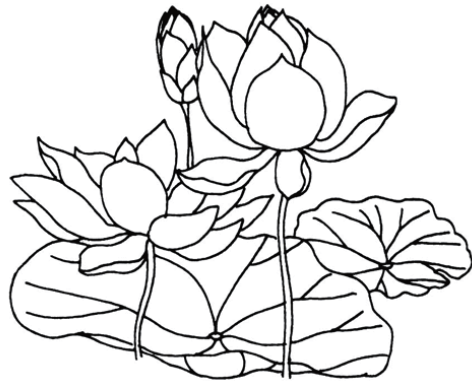
てん だい てんじょう てん あ
天の大なること、天上に天有り
おな にちげつ あ そうそう そう う み
同じく日月有りて、層々として蒼宇に満つ
ち ひろ てん あ ち あ
地の広きこと、天有りて地有り
きょうせい ばんぶつ げいげい けんこん あまね
共生する万物、芸々として乾坤に遍す

一九九五年十一月十日

人覺之分

何為人 情慾滿身
何為神 人心無存
何為佛 善徳巨在
何為道 清靜真人

一九九五年十一月十日



ひと かくしゃ ぶんべつ 人と覚者の分別

ひと なに じょうよく み みつ
人とは何か、情慾身に満つ
かみ なに じんしんそん なし
神とは何か、人心存する無し
ほとけ なに ぜんとくおお あ
佛とは何か、善徳巨きく在り
どう なに しんせい しんじん
道とは何か、清靜として真人

一九九五年十一月十日

人妖之間

狐黄白柳亂世間
烏煙瘴氣跳大仙
無師無修稱大師
癡癡狂狂二十年

一九九五年十一月十一日



ひと ようかい あいだ 人と妖怪との間

ぎつね いたち ほりねずみへび せけん みだ
狐、鼬、針鼠、蛇、世間を乱し
こくえんしょうぎ た ようじゆつ ほどこ
黒煙瘴氣立ちこみて、妖術を施す
し な しゅう だいし しょう
師無く修せずに、大師を称し
てんでんきょうぎょう に じゅうねん
癡々狂々として、二十年

一九九五年十一月十一日

高處不勝寒

操盡人間事
勞心天上苦
有言訴於誰
更寒在高處

一九九五年十一月十一日



高き処寒さに堪えず

人間にんげんの事ことに、気遣きづかい盡つくし
天上てんじょうの苦くに、心こころを勞ろうす
言げん有ありて、誰だれに訴かたるのか
更さらに寒さむしは、高たかき處ところに在あり

一九九五年十一月十一日

大覺

歷盡萬般苦
兩腳踏千魔
立掌乾坤震
橫空立巨佛

一九九五年十一月十二日



だいかく 大覺

まんぼん く なめつ
万般の苦を歴尽くし
りょうぎやく せんま ふ
両脚は千魔を踏む
しょう た けんこんふる
掌を立てれば、乾坤震い
そら ふぎ た おお ほとけ
空を横いで立つ、巨きな佛

一九九五年十一月十二日

打工與修佛

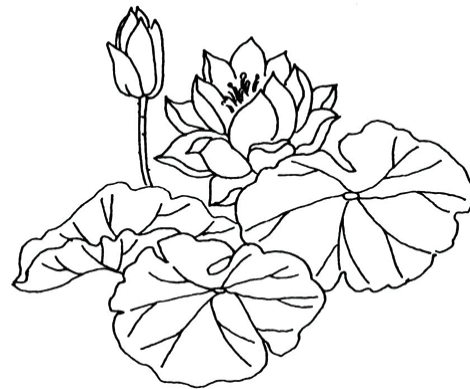
佛教傳戒二千五
名利先去再修苦
今日和尚發工資
上班還有工作服

一九九五年十二月二十五日

しごと ほとけ しゅう 仕事と佛を修す

ぶつきょう かい つた に せん ご ひやくねん
佛教、戒を伝えること二千五百年
みょうり ま さ ふたた く しゅう
名利を先ず去りて、再び苦を修す
い ま おしょう きゅうりょう
今日の和尚は、給料をもらい
しゅつぎん さぎょうふく あ
出勤すに、また作業服有り

一九九五年十二月二十五日



劫後

絶微絶洪敗物平
洪微十方看蒼穹
天清體透乾坤正
兆劫已過宙宇明

一九九六年一月二日

劫難のち

ぜつび ぜつこう ふはい ものたい
絶微にも絶洪にも、腐敗した物平らぎ
こうび じっぼう そうぎゅう み
洪微の十方より、蒼穹を見る
てんたい きよ す けんこん ただ
天体は清く透きとおりに、乾坤を正し
むげん ごうすで す うちゅうあか
無限の劫已に過ぎ、宇宙明るし

一九九六年一月二日



迷

芸芸眾生滿蒼宇
層層有天皆有地
奇景妙無窮
世人迷不醒
想見談何易
修行如蹬梯
破迷在高處
壯觀妙難訴

一九九六年一月三日



まよ 迷い

げいげい しゅじょう そうう み
芸芸たる衆生、蒼宇に満つ
そうそう すべ てん あ ち あ
層層に全て、天有りて地有り
き みょう む きゅう
奇妙なること無窮
せじん まよ さ
世人は迷いて醒めず
み
見んとするが、容易にあらず
しゅぎょう ほしご のぼ ごと
修行は、梯を登るが如し
まよ やぶ こうしよ あ
迷いを破るは、高処に在り
そうかん みょう かた がた
壯觀にして妙なること、訴り難し

一九九六年一月三日



魔變

天象大變
 世人無善念
 人心失控魔性顯
 天災人禍憂怨
 人人相見如敵
 事事都難如意
 世人怎知何故
 修道者可知迷

一九九六年一月四日



ま かわ 魔に変わる

てんしょうおお かわ
 天象大きく変り
 せじん ぜんねん な
 世人は善念無し
 じんしん ひかえ うしな ましょうあらわ
 人心の控るを失い、魔性顕れる
 てんさい じん か うれ うら
 天災、人禍、憂い、怨み
 ひとびと てき ごと あいまみ
 人々、敵の如く相見え
 ことごと すべ い ごと がた
 事々、全て意の如くなり難し
 せじん ゆえ し
 世人、その故をいかでか知らん
 しゅうどう もの なぞ し べ
 修道する者はその謎を知る可し

一九九六年一月四日



道中

心不在焉
與世無爭
視而不見
不迷不惑
聽而不聞
難亂其心
食而不味
口斷執著
做而不求
常居道中
靜而不思
玄妙可見

一九九六年一月四日



道中

こころ あ
心 在らざれば
よ あらそ なし
世と争うこと無し
み み
視ても見ざれば
まよ まど
迷わず惑わず
き き
聴いても聞かざれば
そ こころみだ がた
其の心乱れ難し
しよく あじ
食しても味わわざれば
くち しゅうちやく た
口その執着を断つ
な もと
做して求めざれば
つね どうちゆう い
常に道中に居る
せい おも
静にして思わざれば
げんみょう み べ
玄妙を見る可し

一九九六年一月四日



威徳

大法不離身
心存真善忍
世間大羅漢
神鬼懼十分

一九九六年一月六日



いとく 威徳

ダーファー み ほな
大法、身を離れずして
こころ しんぜんにん そん
心に真善忍、存す
せ けん だい ら かん
世間の羅漢
しん き じゅうぶんおそ
神鬼、十分懼れる

一九九六年一月六日

佛主

誰知天地大
銀河在腳下
乾坤有多遠
轉輪手中拿

一九九六年一月六日



ぶつしゆ 佛主

だれ てん ち だい し
誰か天地の大なるを知る
ぎん が きやつ か あ
銀河は脚下に在り
けんこん とお
乾坤はどれほど遠し
てんりん て なか も
轉輪は手の中に持つ

一九九六年一月六日

法輪世界

美妙窮盡語難訴
光彩萬千耀雙目
佛國聖地福壽全
法輪世界在高處

一九九六年一月二十三日



フールン せ かい 法輪世界

びみょう こと、ご ぎわ づくしても の がた 難し
美妙なること、語を窮め尽くしても述べ難し
こうさいまんせん そうもく かがや
光彩万千、双目に耀く
ぶつこくせい ち ふくじゅそろ
佛国聖地は福寿揃い
フールン せ かい こうしょ あ
法輪世界は高処に在り

一九九六年一月二十三日



縁歸聖果

尋師幾多年
一朝親得見
得法往回修
圓滿隨師還

一九九六年一月二十三日



えん せい か き
縁は聖果に帰す

し さが いく た とし
師を探して、幾多の年
ある ひ やつ と、みづか まみゆ え
ある日やつと、自ら見るを得る
ほう え しゅう ひ かえ
法を得て、修して引き返り
えんまん し したが かえ
圓滿し、師に随いて還る

一九九六年一月二十三日

遊響堂山寺

日月輪流轉
乾坤是轉輪
拈指二百年
響堂舊無存

一九九六年三月六日



響堂山寺に訪れる

にちげつ かわ めぐ
日月は代るがわる転り

けんこん こ てんりん
乾坤は是れ転輪

ゆび ひ ま にひやくねん
指を弾く間に二百年

きょうどう ふる せん な
響堂の旧きは存する無し

一九九六年三月六日

登泰山

攀上高階千尺路
盤回立陡難起步
回首如看修正法
停於半天難得度
恒心舉足萬斤腿
忍苦精進去執著
大法弟子千百萬
功成圓滿在高處

一九九六年四月十五日



泰山に登る

よじ上る高き階、千尺の路
うねりて険しきこと、歩み難し
振り返れば、正法を修するが如し
天半ばに停まれば、得度し難し
恒心をもって足を挙ぐ、万斤の腿
苦を忍び、精進して執着を去る
大法の弟子、千百萬
功成って圓滿し、高き処に在り

一九九六年四月十五日



圓滿功成

修去名利情

圓滿上蒼穹

慈悲看世界

方從迷中醒

一九九六年四月二十一日



功成こうなって圓滿えんまん

名みょう利り情じょうを修しゅうし去さり

圓滿えんまんして蒼穹そうきゅうに上のぼる

慈じ悲ひをもつて世界せかいを看みれば

ようやくまよ迷なかいの中さから醒さめる

一九九六年四月二十一日

太極

真人蓋世張三豐
大道無敵天地行
後世為名亂拳法
改吾太極壞吾名

一九九六年七月一日



太極

よ おお しんじん ちょうさんぼう
世を蓋う真人、張三豐
だいどう む てき てん ち い
大道無敵、天地を行く
こうせい な ため けんぼう みだ
後世、名の為に拳法を乱し
わがたいぎよく あらた わが な こわ
吾太極を改め、吾名を壊す

一九九六年七月一日

苦度

危難來前駕法船
億萬艱險重重攔
支離破碎載乾坤
一夢萬年終靠岸

一九九六年九月二十三日

くど 苦度

きなんきた まえ ほうせん が
危難來れる前に、法船を駕す

おくまん かんけん つぎ つぎ はば
億萬の艱險を、次から次へ攔む

しり はさい けんこん の
支離破碎した乾坤を載せ

いち むまんねん きし ちか つ
一夢萬年、ようやく岸の近くに着く

一九九六年九月二十三日



變異

陰陽倒懸

世人心變

鬼獸遍地

人離道遠

一九九六年九月二十六日



へんい 変異

いんよう とうけん
陰陽は倒懸し

せじん こころ かわ
世人の心は変る

おにけもの ち あまね
鬼獣は地に遍くして

ひと どう はな とお
人、道を離れること遠し

一九九六年九月二十六日

廣度衆生

放下常人心
得法即是神
跳出三界外
登天乘佛身

一九九六年十月十六日



しゅじょう ひろ さいど
衆生を広く濟度する

じょうじん こころ ほうげ
常人の心を放下して
ほう え すなわ こ かみ
法を得れば即ち是れ神
さんがい そと と だ
三界の外へ跳び出して
ぶっしん の てん のぼ
佛身に乗って天に登る

一九九六年十月十六日

心明

為師洪法度眾生
四海取經法船蹬
十惡毒世傳大法
轉動法輪乾坤正

一九九六年十月十六日

於亞特蘭大



心明

師と為^しつて法^なを^{ほう}広^{ひろ}め、衆^{しゆ}生^{じよう}を^{さい}濟^ど度^どす
四^{しかい}海^{ぎよう}は^と經^とを取^とつて、法^{ほう}船^{せん}に^の登^ぼる
十^{じゅう}悪^{あく}の^{どく}毒^よ世^せに、大^だ法^{ぽう}を^{つた}え
法^{ほう}輪^{りん}を^{てん}転^{どう}動^{どう}し、乾^{けん}坤^{こん}正^{ただ}す

一九九六年十月十六日

アトランタにて

難中不亂

正法傳

難上加難

萬魔攔

險中有險

一九九六年十二月二十二日



難なんの中なかでみだ乱れず

しょうぼう つた
正法の伝わるは

むづか うえ なんくわ
難しき上に難加わり

まん ま さまた
万魔が攔ぎ

けわ なか けん あ
険しき中に険有り

一九九六年十二月二十二日

末法

世人不仁
神也不神
人間無道
正念何存

一九九六年十二月二十二日



まっぼう 末法

よ ひと じん
世の人に仁なく
かみ かみ
神も神にあらず
にんげん どう
人間に道なく
しょうねん ど こ あ
正念は何処に存るか

一九九六年十二月二十二日

放下執著

世間人都迷
執著名與利
古人誠而善
心靜福壽齊

一九九六年十二月二十五日



しゅうちやく ほうげ 執着を放下する

せけん ひと まよ
世間の人 は みな 迷い

みょう り しゅうちやく
名 と 利 に 執着す

こじん せい しか ぜん
古人 は 誠、而 も 善

こころしず ふくじゆそろ
心 静かにして 福寿揃う

一九九六年十二月二十五日

有為

建廟拜神事真忙
豈知有為空一場
愚迷妄想西天路
瞎摸夜走撈月亮

一九九七年三月二十八日

有為

びょう た かみ おが こと しん いそが
廟を建てて神を拜む事、真に忙しきなり
う い くう し
有為は空なるを知らざり
ぐまい せいてん みち もうそう
愚昧に、西天への路を妄想し
てさぐ よる である つき すく あ
手探りで夜を出歩き、月を掬い上ぐことなり

一九九七年三月二十八日



遊岳飛廟

悲壯歴史流水去
浩氣忠魂留世間
千古遺廟酸心處
只有丹心照後人

一九九七年九月十一日於湯陰



がくひびようおとず 岳飛廟に訪れる

ひそう れきし りゆうすい さ
悲壯なる歴史は、流水のように去り
こうき ちゆうこん せけん とど
浩氣忠魂、世間に留まる
せんこ いびよう こころかな ところ
千古の遺廟は、心哀しむ処
たんしん あ ごじん て
丹心有りて、後人を照らす

一九九七年九月十一日湯陰にて



訪故里

秋雨綿似淚
涕涕酸心肺
鄉裏無故人
家莊幾度廢
來去八百秋
誰知吾又誰
低頭幾炷香
煙向故人飛
回身心願了
再來度眾歸

一九九七年九月十一日

於岳飛故里



ふるさと おとず 故里を訪れる

あきさめめんめん なみだ に
秋雨綿綿として涙に似て

ていてい しんぱい うが
涕涕として心肺を酸つ

きょうり こじん な
郷里に故人無く

かそう いくど すた
家莊は幾度も廢る

はつびやくしゅう す
八百秋が過ぎさり

だれ われ またなにもの し
誰か吾、又何者を知るか

こうべ ひく いくほん こう
頭を低くして幾本かの香をたき

けむり こじん む と
煙は故人に向かって飛ぶ

み めぐら しんがんな
身を回せて心願了う

ふたた きた しゅじょう さいど かえ
再び来りて衆生を濟度して帰らんと



一九九七年九月十一日

がくひ ふるさと
岳飛の故里にて

遊清東陵

三百歲月似水流
舊殿荒冢滿目秋
誰知今日又來世
它日法正萬古留

一九九七年十月二十六日

於康熙陵



しん とうりょう おとず 清の東陵に訪れる

さんびやく さいげつ すいりゅう に
三百の歲月、水流に似て

きゅうでん こうけ まんもく あき
旧殿、荒家に満目の秋

だれ し きょうまた よ きた
誰か知る今日又も世に来るを

た じつほうただ ばん こ とど
他日法正して万古に留まる

一九九七年十月二十六日

こうきりょう
康熙陵にて

善悪已明

眾生魔變災無窮
大法救度亂世中
正邪不分謗天法
十惡之徒等秋風

一九九七年十一月十五日



ぜんあく めいはく
善悪はすでに明白

しゅじょう ま へん わざわ きわま な
眾生は魔と変じ、災い窮り無し
ダーファー みだ よ すく さいど
大法は乱れた世で、救い済度す
せいじゃ てんぽう そし
正邪をわきまえず、天法を謗る
じゅうあく と あきかぜ ま
十悪の徒は秋風を待つ

一九九七年十一月十五日

遊日月潭

一潭明湖水
煙霞映幾輝
身在亂世中
難得獨自美

一九九七年十一月十七日



にちげつたん おとず 日月潭に訪れる

いったんめい こ みず
一潭明湖の水
えん か いくすじ かがや うつ
煙霞幾か輝きて映る
み らんせい なか あ
身は乱世の中に在りて
どくじ び え がた
独自の美は得難し

一九九七年十一月十七日

憶長安

秦川山水變
長安土下存
盛世天朝去
轉眼千百春
何處尋太宗
大法度唐人

一九九七年十一月二十二日



ちようあん おも 長 安を憶う

しんせん さんすい へん
秦川の山水は変じ
ちようあん つち した ぞん
長 安は土の下に存す
せいよ てんちよう さ
盛世の天朝は去り
またた ま せんひやく はる
瞬く間に千百の春
いづて たいそう たず
何処に太宗を尋ねん
ダーファー とうじん ど
大法は唐人を度せり

一九九七年十一月二十二日

安心

縁已結

法在修

多看書

圓滿近

一九九八年一月二十七日



あんしん 安心

えん すで むす
縁は已に結ばれ

ほう しゅう
法を修しており

おお ほん よ
多く本を読めば

えんまんちか
圓滿近し

一九九八年一月二十七日

回首

悠悠萬古事
造就迷中人
誰言智慧大
情中舞乾坤

一九九八年二月十九日



振り返る

悠悠たり 萬古の事
迷の中の 人を造る
誰か言う 智慧大なりと
情の中に 乾坤を舞う

一九九八年二月十九日

世界十惡

人無善念 人人為敵
破壞傳統 文化頹廢
同性慾亂 心暗魔變
興賭興毒 隨心所欲
開放性亂 導向邪惡
黑幫亂黨 政匪一家
自主亂民 逆天叛道
迷信科學 變異人類
吹崇暴力 好勇鬥狠
宗教邪變 錢客政客

一九九八年七月七日



世界の十悪

ひと ぜんねん な ひとびとてき な
人に善念無く 人々敵と為す
でんとう は かい ぶん か たいはい
伝統を破壊し 文化は頹廢す
どうせい よく みだ こころくら ま かわ
同性の欲に乱れ 心暗く魔と変る
かけ どく さか こころ ままに ふ まう
賭も毒も盛んになり 心のままに振る舞う
せい みだ かいほう じゃあく む
性の乱れを開放し 邪惡へ向かわせる
やくざ あくとう せいしょう いっ か
やくざ、悪党 政商は一家となる
じしゅ らんみん てん さか どう そむ
自主の乱民 天に逆らい道に叛く
か がく めいしん じんるい へん い
科学を迷信し 人類は変異す
ぼうりよく すうはい ゆう この きょうぼう きそ
暴力を吹崇し 勇を好み兇暴を闘う
しゅうぎょう よこしま へん せんかく せいかく
宗教は邪と変じ 錢客、政客なり

一九九八年七月七日



遊雁門關

踏上雁門關
隱隱胸內翻
千年古道在
關中無故煙
延昭揮馬去
風雲逝一千
舉目望關下
大法在中原

一九九八年八月十日於雁門關



が^{んもんかん}んもんかん おとず 雁門関に訪れる

が^{んもんかん}んもんかん あゆ
雁門関を踏めば
いんいん むね うち ひるがえ
隱隱として胸の内に翻る
せんねん ふる みち あ
千年の古き道在りて
かんちゆう こえん
関中に故煙なし
えんしょう うま の ぎ
延昭、馬に乗りて去り
ふううん ゆ いっせん
風雲逝くこと一千
め あ せき した のぞ
目を挙げて関の下を望めば
ダーファー ちゆうげん あ
大法は中原に在り

一九九八年八月十日雁門関にて ^{が^{んもんかん}んもんかん}



同化

經修其心
功煉其身
它日圓滿
真善忍存

一九九二年十一月十八日
一九九八年八月修改



どうか 同化

きょう そ ところ しゅう
經、其の心を修し
こう そ み れん
功、其の身を煉す
た じつえんまん
他日圓滿して
しんぜんにんそん
真善忍存す

一九九二年十一月十八日
一九九八年八月改訂

新生

正法傳

萬魔攔

度眾生

觀念轉

敗物滅

光明顯

一九九八年九月七日



しんせい 新生

しょうぼうつた
正法伝わりて

ばん ま さまた
万魔攔ぐ

しゅじょう さいど
衆生を濟度し

かんねんてん
觀念転ず

ふ はいぶつ めつ
腐敗物は滅され

こうみょう あらわ
光明が顕れる

一九九八年九月七日

笑

我笑 眾生覺悟
我笑 大法開傳
我笑 渡船起航
我笑 眾生有望

一九九八年十一月十六日



わら 笑う

わたし わら しゅじょう かくご
私は笑う 衆生の覺悟を
わたし わら ダーファー つた はじ
私は笑う 大法が伝わり始めるを
わたし わら と せん しゅっこう
私は笑う 渡船の出航を
わたし わら しゅじょう ゆうぼう
私は笑う 衆生の有望なるを

一九九八年十一月十六日

